今日から
はじめる
かんたん
オトメレシピ

なにか生徒会室にご用ですか？

終わった。
俺の人生が終わった瞬間だった。

生徒会室の扉を開けた俺を
柔らかな微笑みで出迎えてくれたのは
我が学園の生徒会長である朝倉音姫先輩。
・・・ならよかったのだが
実際は扉を開けて訪れたのは朝倉先輩の方で
出迎えたのは生徒会室内で先輩の荷物から物色した
体操着を握りしめた俺の方だった。

これはあくまで俺のイメージ画像なんだが
実際には裸どころかパンチラすら
拝んだこともないにもかかわらず
俺は朝倉先輩を密かにおかずにし続けていた。
そんな彼女が先刻荷物を持ったまま
生徒会室に入ってすぐに
手ぶらで扉に鍵もかけずに出ていくのを
目撃してしまった俺は衝動的に扉に手をかけた。

もし誰かが室内に残っていたら
適当な理由を告げて早々に
退出するつもりでいたが
幸い誰も残ってはいなかった。
俺がこんな大胆な行動に出たのは今日
先輩が体育の授業を受けていたのを知っていて
体操着なんて何ヶ月もほったらかしにしている俺なんかと違い
先輩ならその都度洗濯に持ち帰ると思ったからだ。

予想通り先輩の荷物の中から体操着を発見した俺は
さっさとずらかろうと思いつつも
たまらずその場で臭いを堪能していたところに
当の本人が早々に戻ってきて来てしまったのである。
こんなことなら先にブルマの臭いを
堪能するべきだった。
いや、そんなことを言ってる場合でもないか。
ちなみにこれももちろん
俺の妄想によるイメージ画像だ。

「ん？」
少々天然の入っているらしい彼女のことだから
もしかしたらこのまま気づかれずに退出できるかな
とか甘いことを考えてみたが・・・

「え？　それ私の・・・何してるの!?」
残念ながら状況を正しく理解されてしまった。
「ちょっと!返して!」
「いや、その、これはその・・・」
「これは私一人が許す許さないの問題じゃないと思うからかわいそうだけど先生方にも報告して…」
終わった。俺の人生が終わった瞬間だった。
続けて何か話しているようだったけど今の俺の耳には何も入ってこないし俺の方から何か弁解する気力も残ってなかった。
しかし、自分からの話を終えて荷物を抱えて部屋を出ていこうとした朝倉先輩を見た俺の口が自分でも思わぬ言葉を発した。
「自分だって桜内ととても人に言えないようなことしてるじゃないですか!」
「・・・!?」

そう、朝倉先輩は幼い頃から姉弟のように過ごし
現在も「弟くん」と呼び同じくこの学園に通っている
桜内義之という男とデキているという噂がある。
中には「自分の家どころか学園内でも
密かにヤッてるんじゃね？」なんて
根拠の欠片もない話をしてる奴までいる。
そんな頼りにならない噂から
とっさに思いついた
ハッタリだったんだが。
「そ、そんな、
私と弟くんは別に・・・」
あからさまに動揺してるし。
「俺見ちゃったんですよねえ
それも報告したほうがよかですかね？」
「嘘!?ど、どこから・・・」
まてまて、なんかきょろきょろ
しだしたんですけど
まさかここでヤッてたのかよ!?
いやいや、エロいことに関しては
先輩は人一倍厳しいらしいし
ただイチャイチャしてただけ
かもしれないし・・・
「なんなら今度その時撮った
写真持ってきましょうか？
あんなあられもない姿見たら
皆何て言うか・・・」
「お願い!それだけは・・・!」
この動揺っぷりはマジだ。
これマジでヤッてるわ。

「軽蔑されることはわかってるけど
お願い…あのことは誰にも言わないで・・・
今回のことも秘密にするし
他にも何でもとはいかないけど
私にできる範囲のことならするから・・・」
マジかよ、人生終わるどころか
まさかの大逆転だ。
「じゃあ・・・スカート
たくし上げてパンツ見せて
もらうってのはだめですかね」
「へ!?そ、それは・・・」
「それくらいなら「できる範囲」
の内だと思うんですけど・・・
どうでしょう?」
「・・・わ、わかったわ」
「おおっ!」

「・・・
そんなに見ないで」
ぎゅっ
「見るだけ
見るだけですからいいでしょ？」
「見られるだけでも恥ずかしいよ・・・」

「いつも桜内には見せてるんでしょ？
むしろ俺の方がこんな間近で
女の子の生パン見るの初めてなんで
超ドキドキなんですけど」

ぎゅっ

「そういう問題じゃ・・・」

「いいなあ
可愛いなあ
すっごく柔らかくて
ぷにぷにしてそうですね」
「知らないっ
そんなこと・・・っ」

「あの・・・ちょっとだけ触ってみてもいいですかね？」
「え!? さっき見るだけってっ」
「ちょっとだけ！ちょっとだけですから！」
「でも・・・」
「本当にちょっと触るだけですから！・・・って、忘れるところでしたけど優位な立場なのは俺の方なんでしたそんなわけなのでちょっと触らせてもらいます」

「や・・・！」
「あっ」
「やだっ」
「おおっ
すげえ！
ホントにやわらけえ！
ぷにぷにしてる！」
「肌を直にじゃないのが残念ですが
下着のすべすべした感触もまた
いいのかもしれませんね
・・・っておっ！ここは？」
ふにっ
「やあっ
そこはダメ！」

「おお！ここがわれめなんすね！正直ここまで触る気はなかったんですがこれは……！」

「ひゃっ」

「だめ・・・そんなとこ触らないで・・・っ」

「いや、ほら、ここもうちょっと強くしたら下着ごしでも指入っちゃいますね！」

「もう・・・やめてもう、いいでしょ？」

はぁ

はぁ

「ああ、すいません童貞の俺じゃ朝倉先輩を気持ちよくさせてあげられてないんですねなんかごめんなさい」

「そういう問題じゃなくて・・・っんんっ」

「まあでも今回は俺が楽しむことを優先させてもらいますねすいません」

「そんな・・・謝ればいいってもんじゃ」

ぷにっ

「・・・触るだけって言いましたけど手でだけとは言ってませんでしたよね？」
はぁ
はぁ
「へ？」
「まあ、つまり例えば舌で触るってのはアリかなって」
「え!? やだ！」
「だめえっ」
ぷにっ

「いや！やめて！」

「やだあっ」

「思わず空いた手で足触っちゃいましたけどやっぱ素肌はいいっすね」

「やだ・・・もういいでしょ？これくらいで終わりに・・・」

「まだもうちょっと！もうちょっとだけ！」

「んんっ」

「んぷっ じゅるっ」

ぐいぐい

むぎゅっ

じゅるっ

「はあっ
はあっ
わかりました
じゃあとりあえず
お股触るのはこれくらいにして」

はあ

はあ

「ほっ」

「こうして見上げる位置に来るとですね
さっきまでは見えてなかったブラまで
ちらちら見えるんですよ」

「え!?
やだ!」

むぎゅ

「それがどうにも気になって仕方ないんで
もうちょっとたくしあげて
ブラもちゃんと見せてくれません?」

「い、いや・・・っ」

じゅるっ

「さっきも言いましたけど立場上
見せろ!って強気に命令しても
いいですけどここはまあひとつ
お願いしますってとこで」

「・・・はい」

「おお！たまんないっすね！これ！」
「は…恥ずかしい」
「ただ見せてるんじゃなくたくし上げてるってのがなんともエロい感じですね！」
「・・・っ知りませんっそんなこと」

「でもやっぱりその
ちゃんと体見たいってのもあるんで
制服だけちょっと脱いでみて
くれませんかね？」
「ちょっとまからちょっと
ちょっとって全然
ちょっとじゃなくなってる
じゃない・・・！」
「まあそれもそうなんですけどね
俺はすでに朝倉先輩が校内で
アレしてるとこ見ちゃってるんで
今更下着姿くらいで
恥ずかしがる必要なんてないっすね」
「そんなこと私に
関係ない・・・」
「ね？
お願いしますね」
「・・・わかった」

「うーん
実に素晴らしい眺めです」

「そんなに・・・見ないで」

「この体を桜内は毎日
好きにできてるのか
くっそー羨ましすぎる」

「別に毎日ってわけじゃ・・・」

「ぶっちゃけ他の男とは
経験あるんですか？
セックスの」

「ありません！そんな・・・
弟くん以外の男の人と
した・・・ことなんて」

「ああ、よかった」

「つか、本当にセックスは
してるのね」

「っていうか他の男とも
してみたいって気は
起きないものなんですかね？」
「起きません！
他の人となんて・・・！」
「童貞の俺が言うのもなんですが
人によって別の気持ちよさとか
あるんじゃないんですかね？
気持ちいいんですよね？セックスって
はい、正直に答えてくださいね」
『・・・
気持ち・・・いいです』
「やばい
今の一言はかなりくる」

「じゃあ例えばですよ？
胸触られてるだけでも
気持ちよくなるんです？」
「・・・
弟くんになら」
「でも他の人に
触られたことないなら
わかんないじゃないですか」
「そんなこと・・・
わからなくてもいいです」

「いや、俺は気になります
ということで俺が相手でも
気持ちよくなるか検証して
みてもいいですか？
っていうかもう我慢出来ない
ので触ります」
「え？
ちょっとっ」

『・・・?』
「あ、もう嫌とか言わないんすね」
はぁ、
はぁ、
「だって、やめてって言ってもやめてくれないんだよね?」
「はい
おっしゃるとおりです
では今度は下着越しじゃなく
いきなり生でいかせてもらいますね」
『・・・うん』

『ん・・・っ』
「ほあああっ
やべえこれ！
やっぱり下着越しから始めればよかった！
目の前に朝倉先輩の生おっぱいがある衝撃と
触った感動がダブルで押し寄せてきて
頭がパニックになってる！」
ふにゅ
『んうっ』
「すげー
おっぱいふわふわのむちむちでサイコー！
乳首かわいい！！
ね？どうですか？
桜内以外の男に触られても
気持ちいいですか？」
むぎゅ
『・・・』

「そんなすぐにはわかんないか
つうか俺のほうが気持ちよすぎて
我を忘れそうです！」

「あうんっ」

ふにゅ

「んあ・・・っ」

「こんなこと言われても
嬉しくないかもしれませんが
俺今めっちゃ嬉しくて
感動してるんです！
もう泣きそう」

むぎゅ

「ああ！もう！
おっぱいかわいい！
乳首かわいい！
もうしんぼうたまらんです！」

「あ・・・っ」

「んちゅっ」
「ひゃんっ！」
「ん！んぷ！んちゅっ」
ふにゅ
「ああんっ ち、乳首吸っちゃだめえっ！ ひゃんっ」
「あ、今の反応ひょっとして 気持ちよかったんですか？」
「え？ そ、そんな 気持ちよくなんて…ないっ」
ちゅぱっ

「ホントに？
ちょっとくらい
ちょっとくらい
気持ちよくならなかった？」
「なりません！
あなたみたいな人に
こんなことされても・・・」
ふにゅ
「ホントのホントに？」
「なってません！」
「そうすか・・・
ごめんなさい朝倉先輩
本当にごめんなさい」
「え・・・？」
ちゅぱっ

「俺ばっかり気持ちよくなって
申し訳なくって
少しでも気持ちよくしてあげられたらなあって
自分なりに頑張ってみたんですけど
俺はやっぱり役立たずみたいです」
「え・・・
あの・・・・」
はぁ
はぁ
「本当に嫌な思いばかりさせて
ごめんなさい！
ごめんなさい！」
「いや・・・その・・・・
そこまで嫌ってわけでも
全然気持ちよくないって
わけでも・・・・ない・・・・
かも・・・・」
「いや、いいっすよ
俺みたいなクズに
気を使わなくても」
「それはそうなんだけど・・・・
本当にちょっとくらいは
その・・・・」
『・・・』
「気持ち・・・・
よかったかも・・・・」

「おっしゃっ
その言葉が聞きたかった」
「へ・・・!?」
「気持ちいいなら
もっとしてもいいですよね?」
ぷにゅ
「ひゃうっ!」
「い、今のはほとんど
言わされたみたいな
ものじゃ・・・っ」
「あ、やばい
ちょっと高まりすぎて
もう乳首舐めてる場合じゃない」
ちゅぱっ
「くっ」

「へ？ちょっと？やだっ！」
「いや、もう二発抜かないと辛抱たまらんのですよよよ」
「やめてっいきなりこんな大きいの怖いから！」
「大きい！？今大きいって言った？それって桜内のと比べて？」
「あっあのっそ、そういうわけじゃ・・・！」

「やっぱりちんこのサイズも一人一人違うもんなんすね！じゃあ気持ちよさもきっと違って・・・
あ、だめだもう出る」
「へ？きゃっ！？だめえっ！」
「いえ、手がおっぱいから離れなくなちゃったみたいなんでここでちんこおさえるしかないんすよっ」
「さっき離してたじゃ・・・っ」
むぎゅっ
ぐぐぐ

「きゃっ！」
「やあんっ！」
ぐぐぐ
どぷっ
むぎゅ
ぐぐぐ

「はあっ
はあっ
はあっ
あざーしたっ
おっぱいマジ気持ちよかったです
どうです？
いつもと違うちんこの感触は？」
はあっ
はあっ
「う・・・」

「・・・知りません」
はぁ、
はぁ、
「でもさ、本当に桜内より大きいかどうかは置いといても違いがあるのかどうかは気になりません？」
「そんなこと・・・べつに・・・」

「別にね、桜内よりちんこのでかい
俺の女になれい！とか言いたいわけじゃなしに
先輩が桜内と一生添い遂げるとしたら
他の男のちんこに触れる機会はもう
今この時を逃したら一生ないわけじゃないですか」
「・・・」
はぁ
はぁ
どろっ
「しかも今って俺に強要されてる状況で
浮気ってわけじゃないんですから
先輩が桜内に罪悪感を感じる必要はないし
最悪桜内にこのことがばれても弁解できるし
桜内だって先輩を責めたりしませんよ」
「・・・」
「もし先輩が浮気上等！って考えなら
こんな機会は無視してもいいんでしょうが
そうでないとしたら本当に今後の人生
最初で最後の機会すっよ？」
「・・・わかりました
どうせ断ってもまた脅して無理やり
させるんでしょ？」

「ひゃふっ」
「触ってとは言いましたけど
いきなり舐めてくれるとは・・・っ」
「ん・・・っ
どうせさせるつもり
だったんでしょ？」
ちゅぷっ
ちゅぷっ
ちゅぷっ
「ええ、まあ、
そうなんすけど
うおっ！」
「んぷっ
ちゅるっ
ちゅっぷ」
「どうです？
桜内のちんこと違います？」
「・・・
違いは・・・あるけど
おちんちんに違いがあるからって
そんなこと別に・・・」

「今おちんちんって言いましたよね？
もう一回言ってみて」
「・・・おちんちん」
「女の子がおちんちんって言うの
すっごくいいです」
「もう言いません」
「まあまあ
そう言わないで」
ちゅぷっ
ちゅぷっ
ちゅぷっ
「朝倉先輩でも怒ると
けっこう口調きつくなるんですね
そんなとこもいいなあ
つくづく桜内が羨ましい」
「・・・
ぢゅぷっ
ひゃふっ」
「そうだ
桜内は先輩のこと『音姉』って
呼んでるんですよね
俺もせめて『音姫さん』って
呼んでいいですか？
つか呼びます」
「・・・いいけど」

「じゃあ音姫さん
舌でだけじゃなくて
直接口にふくんでもらえません？」
「ん…
んちゅっ」
ちゅぷっ
んちゅっ
ちゅぷっ
ちゅぷっ
「あっ、やべ、これ
音姫さんのかわいい唇
めっちゃきもちいいです！」
「んちゅっ
ちゅっ
ちゅぷっ」

「ちゅぷっ
ちゅるっ
じゅるるっ」

ちゅー!

ちゅぷぷっ

ちゅぷぷっ

ちゅぷっ

「だめだ!音姫さん
俺もう限界です
イきます!」

「んっ
んぷっ
ひゃぷっ」

「唇離さないってことは
いいんですね!
そのまま出しますよ!?」

「んくっ
んーっ」

「ふあっ
あぁんっ！」
びゅっ
びゅっ
びゅっ
びゅっ
「あっ
あふっ
んぷっ！」

「やべえ、これと、止まらない・・・っ」

「んぐっ んぐっ んっぷっ」

ちゅぷっ

ちゅーー

ちゅぷっ ちゅぷっ

「お、音姫さん・・・」

「んぷっ ごぷっ んっくっ」

「んくっ
んっ
んくっ」

「あ、あの
自分で出しといてなんですが
無理に飲まなくても・・・」

ちゅー

ちゅぷっ

ちゅぷっ

ちゅぷっ

「んっ
じゅぷっ
んんんっ
んうぅぅっ」

「音姫さん・・・」

「ぷはっ
はあっ
はあっ
んぐっ」

はあっ

はっ

とろ…

「はあっ
はあっ
あっ」

「まさか…
音姫さんが俺の出した
ザーメン飲んで
くれるなんて…
感激っす」

「はっ
はあっ
あふっ」

「なんかこうなってくると
速攻でイっちゃったのが
申し訳ないっつうか
すいません
童貞の早漏で」

「別に・・・
早いとか遅いとか
気にすることじゃ・・・
ないと思う」

はあっ

とろ・・・

はっ

はあっ

「でもこんなんじゃ
音姫さんを満足させること
できなさそうで」

「私は・・・
無理やりさせられてるだけで
満足とか・・・考えてないし」

「そ、そうでしたね」

「ひゃぷっ んぷっ ふひゃっ」
はあっ
はっ
とろ…
はあっ
「あ、あの…そんなにいつまでも舐めていられると また…」
「ぷはっ …でもどうせ最後まできれいにしろって言うんでしょ？」
「いや、そこまで言う気は…いやいや、そうですね お願いします じゃなくてし、しろ！」
「…はい んちゅっ」

「んちゅっ
ちゅぷっ
ひゃふっ」
「そんな丁重にちんこ
お掃除してもらったら
俺また・・・」
じゅるっ
ちゅぷっ
くちゅっ
「んんっ
ぷひゃっ」
「しかし俺が脅していたはずなのに
いつの間にかそっちに主導権
持ってかれてるみたいになってて
音姫さんもすっかりその気に・・・」

「・・・っ」
う、
まさに弟を躾けるお姉さんのような
眼差しに威圧されて言葉を呑んでしまった。
「余計なことは言うな」と訴えるようなその目に
『音姫さんは俺に脅されて不承不承しているだけ』
という俺の提案への了承を感じた。
・・・多分。
だからここで
「音姫さんもその気になって
くれたんですね」なんて
言うべきではないだろう。
それにしても腹をくくったとたん
あっという間に主導権を握っちゃうのは
さすがと言うか
ひょっとしたら情事を目撃した云々の話も
ハッタリだとすでに勘付いているのかもしれない。
そもそも色んな意味で
最初から俺が勝てる相手じゃ
なかったのではなかろうか。

それにしても・・・
いくら『脅されての不本意の行為』
という建前を受け入れたにしても
ちんこへの興味というか執着が凄い
と感じるのは単に俺が童貞だから
だろうか？
とかなんとか
余計な思考がちんこへの意識を
散漫にさせたことを察してか
それともやはりただ単純に
ちんこへの執着が強いだけなのか
音姫さんの責めはエスカレート
していく。
「んちゅっ
ちゅぱっ
ちゅっぷっ」
くちゅっ
ちゅぷっ
じゅるっ
あっという間に
俺のちんこは再び敗北の時を迎えた。
「あ、あの
音姫さん・・・
俺もう・・・」

「もう、何？」

「あ、はい
またイきそうです」

「ただお掃除してた
だけなのに？」

「してただけって・・・
はい、すみません」

「・・・
どうして
ほしいの？」

「あの、できればまた
口の中でがいいので
くわえ・・・てください」

「・・・うん」

「んぷっ
んくっ
うんんんっ」

「んぐっ
ぢゅるっ
んっぐんっ」

「はあっ
はあっ」

「んっぷっ
ちゅうっ
んちゅっ」

「音姫さん・・・
またそんなに
飲んで・・・」

ぷっ

ごくん

んちゅーっ

「んんんっ
んっぷ
ぷぷっ」

「また・・・
搾り取られる・・・」

「ぷひゃっ はあっ はっ」
「まずい このままだと俺の精液 全部口から絞りとられる ような・・・」
はあっ
ごくんっ
はあっ
はあっ
「なに? またお掃除するの?」
「いえ、 名残惜しいですが 口でしてもらうのは これくらいにして」

この状況も悪くないんだが
少しは主導権を奪い返さないとな。
「次はお尻を向けてもらえますか？」
はぁ。
はぁ。
はぁ。
「え・・・そんな・・・」
しらじらしいというかあくまでこのスタイルは崩さない方向なんだな。
「ほら早く早く」
「はい・・・」

「これで・・・・
いい・・・・？」
「そういえばさっきから
前の方からばかり見ていて
お尻ちゃんと見てませんでしたね」
「・・・ひ」

「それにしても
お尻とパンツの組み合わせって
神々しいと思いません？」
「・・・
何が・・・？」
「もちろん音姫さん
だからこそなんですが
この眺めが素晴らしすぎて
脱がすのがもったいなく
なってきます」
「そ・・・
そんな」

「そんなに・・・見ないで」
「何いってるんですか
さっきまでさんざん
人のちんこ眺めて
いじりまわしてたくせに」
「だってそれは・・・っ」

「では見ているだけはここまでにして」
「ひゃっ」
ちゅ
「ひゃうっあぁぁんっ！」
「そこ触っちゃだめえっ！」

「ひゃあぁんっ」
「まだちょっと触っただけなのにそんなに反応しちゃうんですか？」
「だ・・・だってそこ・・・・・」

「そんな大声出しちゃうと
誰か来ちゃうかもしれませんよ」
「だ、だって・・・」
「そういえば今更なんですが
ここ今から誰かきたり
しません？」
「今日はもう役員は皆帰ったし
弟くんも用事があるって言ってたし
近い行事もないもないから
他に誰かが来るなんてまず
ないと思う…」
「それにこの階なら
窓から覗かれる心配なんて
ないでしょうね」
『・・・』
『・・・あっ』

「いや、その
そんなことはいいんですよ！」
「んうんっ」
「と、とにかく多少
声を出したり変なこと
したりしても心配ない
っぽいんですよね？」
「ん・・・
うん・・・っ」

「な・・・
何するの・・・・?」
「でも・・・
変なことって・・・・」
「いや、音姫さんがしてくれた
ちんこしゃぶったり
ザーメンごっくんしてくれたり
したことに比べたら全然
普通のことなんですけど」

「んぎゅっ」
「ひゃんっ！」
「ああ、音姫さんのお尻
柔らかいし暖かいし
いい臭い」
「やめてっ！
そんなことっ
だめえぇぇっ！」
「やあぁぁぁんっ！」

「やっ
だめっ
そんなとこ・・・汚いよっ」

「音姫さんの体に汚いとこ
なんてあるもんですか」

「もう、
やめてっ
そんなとこっ」

「やめない
お尻いいっ、大好き」

「ねえ音姫さん
このパンツ貰えません？」

「あ、あげません！」

「強引によこせ！って言ってもいいんですが
ノーパンで帰すのもかわいそうなんで
ここは引いときます
俺は大好きな音姫さんとエロいことが
したいだけで虐めるつもりはないんで」

「だけって
そんな・・・」

「だからそろそろ本格的に
やらしいことしましょう」

「それにしても音姫さん
処女でもないのに
反応がいちいちかわいい
ですよね」
「別にそんな・・・」
「まあ童貞なんで
普通の反応も全然
わかってないんですが」
「だって・・・弟くんは
あなたみたいにこんな
変なことしないし・・・」
「いやいや
いくら童貞のしったかといえど
特別変なことはしてないと
思いますけど？」
「そ・・・
そうなの？」

「ほら、パンツも普通に脱がすだけですし」
「や・・・っ！」
「うわあ、ついに見ちゃったよ音姫さんの生尻おまんこかわええっお尻の穴もかわええ！」
「そ、そんなとこ見ないで！」
「ええ？なんで!?見るなとか無理でしょ！」

「お、弟くんはそんなことしないし・・・。」
「ええ？それってちょっとつまんなくない？」
「そんなこと・・・やんっ！そんなとこつかまないでっ！」
「ほら！こんなに柔らかくてかわいいお尻目の前にしたらそりゃもういろいろ見たりしてみたくなるって！」
「ならないよ！そんな・・・！」
「じゃあせっかくだからもっと変わったことしてみる？」

「例えばこっちの穴に挿入してみるとか」
「へっ？なに!?ひゃっ！」
「きゃあああああぁっ！」
「音姫さん声でかい声でかいって！」
「やめて！そんなとこ触らないで！」
「わかりました冗談ですよ冗談」

「そもそも俺だって
超初心者なんですから
お尻の穴なんて難易度高そうで
頼まれても無理っすよ」
「はあっ
はあっ
もう・・・
本気で怒るよ?」
「じゃあ何処にちんこ
入れればいいんです?」
「え?
そんなこと・・・」
「何処です?」
はぁ
はぁ
はぁ
「もうちょっと下の・・・」
「だから何処です?
ちゃんと名称言って
くださいよ」

「お・・・」
「お？何です？」
「お・・・おまんこ・・・です」
「んんっ♥」
「ああ、ここでしたかすいませんもう一回名前言ってもらえます？」
「おまん・・・こ」
「すいませんよく聞こえませんでした」
「おまんこ・・・っです」

「やっぱ女の子の口から
ちんちんとかおまんことか
言われるとめっちゃ興奮
しますね」
「きゃあぁぁっ！
やめてっ
そんなとこ
広げないで！」
「そんなとこ
じゃないでしょ」
「お、おまんこ
広げないでっ！」
「いやだって俺
初めて見るんですよ？
そりゃちゃんと見たいでしょ
すっげー
膣内ってこんなふうに
なってんすねーっ」
ちゅぷ
はぁ
はぁ
はぁ
ぐちゅぐちゅ

「それにしてもここずいぶんと濡れてません？」
「そ、そんなことない・・・」
「そうですね音姫さんが俺のちんこしゃぶって今からそれを突っ込まれるとこ想像しちゃってお股びしょにしょにするなんてありえないですからね」
「・・・っ」
はぁ
はぁ
はぁ
「こんなみっちりした膣内にホントにちんこが挿入できるのか正直不安だったんですがこの謎の湿り気のおかげで俺の脱童貞もスムーズにできそうなきがします」
ぐちゅぐちゅ
ちゅぷ

「本当に・・・・
するの？」
「何を今更・・・・
いやいや
音姫さんはそりゃ嫌なんでしょうけど
ここまできて俺に止めろなんて
無理ですよそりゃ」
「んんんっっ！」
「ふわっっ！
これまたやべえっっす
まんこにちんこ
こすりつけてるだけでも
十分過ぎるくらい
気持ちいいっっす！」
「そんなに・・・・
すりすりしないでっっ」

「これちょっと気持ちよすぎるんで
そうですね
挿入までしなくても十分かも
しれません」
「え・・・
そんな・・・・」
「やっぱり
大好きだった音姫さんに
脅して本番までするのは
気が引けるというか
そこまで外道になる度胸は
ないですからね俺」
「あの・・・・
そ、それは・・・・」
「もちろん音姫さんの
同意を得られれば別ですけど」
「あの・・・・
私はその・・・・
あなたがどうしてもって
言うなら、その・・・・」
ちゅぷ
はぁ
はぁ
はぁ
ぴくぴく

「冗談ですってこれはあくまで俺の強制なんですから！」
「え・・・？な？きゃっ！」
「おちんちん入って・・・っ」
「あっ！ひゃっあぁぁんんんっ！」
「ふあああ！すげええっ！おまんこ気持ちええ！」
「やっ！ああんっ！」

「どうです？音姫さん！初めて味わった彼氏以外のちんこは？」
「ちなみに俺は最高です！」
「はあっはあっ本当に・・・弟くんのじゃないおちんちん入っちゃってる・・・っ」
「それにしてもこれはさっき言ってたみたいな変な行為でもないでしょうにずいぶんいい反応してくれますよね」
「そんなこと・・・っ」
「おかげで更に興奮しますよ！」
「し・・・しなくていいから！」

「すいません正直なとこ経験済みの人はゆるゆるだなんて話真に受けていたんですが全然そんなことなかったです」
「何・・・その話・・・っ」
「むしろすげー締め付けで今にも搾り取られそう」
「そんなこと・・・」
「でも処女じゃないんですから最初からガンガン動いちゃっても平気なんすよね？」
「そ、そういうわけじゃ・・・」
「では、さっそく」
はあ
はあ
「え・・・？」

「いい！
最高に気持ちいいです！
音姫さんのまんこ！」
「あっ！
ひゃあんっ
まってぇっ！
いきなりそんなに
激しくしないで！」
「いやあああああぁっ！」
「ひゃあああああぁんっ！」

「はあっはあっあ・・・っ」
「なんですかもー処女じゃあるまいし桜内と何度もしてるんでしょ？まあそういう反応してくれるのは興奮しますけど」
「だって・・・」
「だって何です？こっちは辛抱たまらんのですが」
はあ
はあ
「そ、それは・・・」

「ほら、なんです？
言葉から察するに
挿入自体を止めて欲しい
わけじゃあないんですよね？」
「それは
その・・・っ」
「ひょっとしてトイレ
行きたくなったとか？」
「ち、違う・・・っ」
「おしっこならこのまましても
いいですよ？
・・・って言うのも初心者の俺的には
ちとハードル高いかな・・・」
「んっ
んんうっ！」

「じゃあ何なのよ？もう！」
「だってっ
おまんことってもきついんだもん！」
「だから！
桜内としょっちゅう
ズコバコしてんでしょ？」
「ああぁぁんっ！
だから違うって・・・っ」
「お、弟くんのおちんちん
こんなに大きくないもん！」

「マジで？
さっき言ってたこと
本当だったんだ！」
「それは
その・・・」
「でもっ
おちんちんの大きさが
違うからって
そんなこと私は別に・・・」
「でも人間性はともかく
肉体的な感じ方は異なるって
わけですよね？」
「それは、その・・・
そうだけど・・・っ」

「俺のちんこが特別大きとは思いませんがそうとわかれば！」
「ひゃっ！やあああああぁんっ！」
「思いっきり楽しみましょう！」
「あぁんっ！だからそんなに激しくしないで！」
「あああああああぁぁんっ！」

「どうですか音姫さん
彼氏よりでかいちんぽで
突かれるのはやっぱり
気持ちいいんですか？」

「やあっ
ああんっ！」

「べ、別に
おちんちんが大きくっても
苦しいだけで気持ちよくなる
わけじゃあないから！」

「え!?
そうなんですか？
俺は世間の嘘に
まんまと騙されて
いたんですか!?」

「ひゃっ
あんっ！」

「し、知らないよ
そんなこと！」

「そのわりに音姫さん
めっちゃ気持ちよさげな
声出てません？」

「ひゃっ
あんっ
あああぁんっ！」

「そ、そんなこと
ありません！」

「表情も心なしか
そう見えるんですが」

「やっ
あんっ
やあぁんっ！」

「そんなこと
ないってば！」

「ならば！
俺がもっと！
がんばらないと！」

「あんっ
やだぁっ
だからそんなに激しく
おちんちん動かさないで！
あぁんっ！」

「動きますよ！
気持ちいいんだから！」

「やぁんっ
あぁっ」

「あっ
あっ
やっ
あああぁんっ！」

「とか言っておきながらすいません！実はもう限界なんで俺だけイっちゃいます！」

「え？待って！イくなら外に・・・！」

「でも抜くタイミングがつかめないんですぐあだめですもうこのまま」

「だめぇ！外に出して！」

「膣内に出しちゃだめえええっ！」

「だめええっ
やあんっ！」
「ひゃっ
あっ！
あうううっ！」
「あああああああああんっ！」

「はあっはあっはあっ」
「すいませんこんなに早く俺だけイっちゃったうえに膣内で出しちゃって・・・こんなんじゃ音姫さんは全然気持ちよくなかったですよね・・・って」
「ひゃっあっあっひっ！」
「んんっんっ」
「はっはっはうっ」

「射精はもう止まってるのに
まだ音姫さんの体すごい
びくんびくん痙攣してるみたいに
はねてるんですが・・・」
「んっ
んくっ
んんんっ！」
「これって
イってるんじゃ・・・」
「んふっ
ち、違が・・・
んんんんんっ」
「んっ
ひゃんっ
あうぅぅんっ」

「そ、そうなんですか？
膣内で出されると女の人って
皆こうなるんですかね？」
「し、知らない
そんなこと・・・」
「それにしても・・・
そうだ
次はちょっとやり方を
変えてみましょうか」
「え・・・？
次って
まだ続けるの？」
「だってほら
もうちんこ復活
してきたし」
「やっ
ちょっと待って！」
はぁ
はぁ
はぁ
どぴゅ
どぴゅ

「よいしょっと
この体勢もいいですね」
「それでですね
音姫さん」
「ひゃんっ！」
はぁ
はぁ
はぁ
「今からは
嘘でいいので
気持ちいいって
言ってください」
「え・・・
何を・・・？」
「演技して
欲しいんですよ
気持ちいいって感じに」

「嘘でいいんです、嘘で
気持ちいいとか桜内のちんこよりいいとか
今までこんなに感じたことないとか」
「そんなこと…」
はぁ
はぁ
はぁ
「だから嘘でいいんです
俺が音姫さんを脅迫して
言わせるのであって
音姫さんの本心じゃないよって
話なんです」
「…」
「なんなら血判書作るなり
神様に誓いを立てるなり
してもいいですから
音姫さんは本当は嫌がっていて
ちっとも感じでなんかいなかった
のに俺は脅迫して気持ちいいと
言わせてましたって」
「…」

さっき音姫さんはまちがいなく『脅されての不本意な行為』に
無言で同意を示してくれた。
そして膣内射精後の体の反応が本当に絶頂をむかえたものだったとしたら
この提案にものってくると思うんだが・・・。
『・・・わかりました』
よっしゃ！
はぁ
はぁ
「ならさっそく聞きますけど
俺のちんこ突っ込まれて
おまんこ気持ちいいですか？」
「うん・・・
おまんこ気持ちいいの・・・。」
「桜内のちんこよりも
気持ちいい？」
「うん・・・
弟くんのおちんちんより
大きくって
おまんこ気持ちいい・・・。」

「そうですか、そうですか！やっぱり大きいちんこの方が好きなんですね音姫さん！」
「ひゃんっ！うん！いいの！おちんちん大きくて気持ちいいの！」
「うんっ弟くんのおちんちんじゃこんなになったことなかったの！こんなにおまんこ広げられて気持ちよくなれるなんて私知らなかったの！」
「それじゃもっと激しくしてもいいんです？」
「うんっ！もっとして！もっとその大きいおちんちんでおまんこじゅぷじゅぷしてえ！」

「だから挿入前から
おまんこびしょびしょに
してたんですね」

「ああぁんっ！
だっておしゃぶりしてたときから
こんな大きいおちんちんが
これから私のおまんこに入れられるって
想像したら止まらなくなっちゃったの！」

「なんだ
本当は俺以上に我慢
してたんですね」

「うん！
本当は挿入された瞬間
イきそうだったのに
ずっと我慢してたんだから！」

「へえ
それじゃさっき膣内に
出されたときは
やっぱり・・・」

「うんっ
本当は膣内に出されて嫌ななはずなのに
お腹の中いっぱい精液満たされて
気持ちいいのが抑えきれなくて
今まで感じたことないくらい
強くイっちゃったの！」
「そこまで気に入ってもらえて
俺も嬉しいです！」
「で、でも
私が好きなのは
あくまで弟くんであって・・・っ」
「でもちんこは俺の方が
お気に入りなんでしょう？」
「あああぁぁんっ！」

「うん！おちんちん好き！好きなのは弟くんだけどおちんちんはあなたの方が好きなの！」
「俺も音姫さんのおまんこ大好きです！」
「ひゃあああぁぁぁんっ！好き！好き！大好き！あなたの太くて大きいおちんちん大好き！もっと突いて！もっと激しくしていいから！」
「もっとおちんちんちょうだああいっ！」

「ちょっちょっ
ちょっと待ってください！
まずい！正直音姫さんがここまで
求めてくる人だとは思ってなかったんで
童貞の俺には荷が重すぎるかも
しれません！」
「だあってえ・・・・
本当はエッチするの大好き
なんだもん・・・・っ」
「そこまで言いますか
なら音姫さんのよくなるように
そっちでうまいこと
動いてもらえます？」
「うん・・・・
いいよ
もっと気持ちよくして
あげるね・・・・」

「じゃあ・・・まずこうしてね♥」

「おお・・・すげー気持ちいいしいい眺めです」

「うふふっあぁんっ」

「いいですこれ・・・それに音姫さんもすごく気持ちよさそうなやらしい顔してる」

「これはあなたがしろって言ったんでしょう？私はしかたなくしてるだけだもん」

「それにしたってさっきまでとは全然・・・」

「そんな子にはもう気持ちいいことしてあげませんっ」

「冗談！冗談です！そ、その調子で俺の言う通りに気持ちいいふりを続けろ！」

「うふふっいいよ♥いっぱい気持ちよくエッチしてるふりしてあげる♥」

「ひゃあああぁぁんっ！」
「ど、どうしました!?」
「奥に、奥に何か！こんなふうに奥に当たるところがあるなんておちんちんがこんなに奥まで届くなんて私知らない！」
「あ！わかります！なんかさっきまでは感じなかった何かに当たってるような感触が・・・」
「もうちょっと・・・こっちに、そう、もうちょっと寄ってみて？」
「え、えっとこうですか？」

「そ・・・そこ
うんっ♥」
「こ、こんな
感じですか？」
「あ・・・っ！
もうちょっと
こんな感じに・・・」
「こ、こうすか？」
「ひゃうんっ！
そう・・・まのまま
もっと強い感じに・・・っ」

「こんな感じですか！」

「ふあああああああぁぁぁぁぁっ
あっ
あっ♥
あああああぁぁぁぁぁんっ！」

「おお！
確かにこれは・・・っ」

「ひゃうううんっ！」

「あんっ
だめえっ♥
さっきよりもずっと奥まで
おちんちん突き上げてくるっ！
このままじゃ私の体の中全部
おちんちんに貫かれちゃうっ！
私の全部
犯されちゃうううううっ！」

「私・・・っ
こんなの知らないっ
こんなに気持ちいい
エッチしたことないっ！」

「お、俺も
最高に気持ちいいっす！」

「気持ちよすぎて
これからどうなっちゃうのか
わかんないよ！」

「お、俺
脱童貞でこんなに
気持ちよくなって
いいんですかね!?」

「いいよ♥
もっと気持ちよくなって
そのおちんちんで
私のことも
もっともっと
気持ちよくしてええっ♥」

「わっかりました！精一杯務めますっ」
「ひゃあああああああああああああああんっ！」
「これでいいですか？」
「ひゃうっ だめぇっ♥ そんなに強くされたら 子宮まで壊れちゃうよおおおっ！」
「いやあああぁぁぁぁぁっ！」

「だめ・・・っ
私もうイく・・・っ
またイっちゃう・・・！」
「ええ？
あの、俺はまだ
もうちょっとは
がんばれそう
なんですが・・・」
「だめ・・・
もう我慢できない・・・」
「えっと、
ちょっとペース緩めて
注意を分散させて
みるとか・・・っ」

「これなら？おっぱいに注意が分散されれば少しは落ち着いて・・・」
「あぁぁぁぁんっ！おっぱい気持ちいいっ♥もっともんで！おっぱいも気持ちよくしてイかせてえええっ！」
「しまった！やっぱり逆効果だったか！」
「ごめんねぇっ私だけ先にい・・・いっ・・・イっちゃう・・・っ！」

「ひゃっ！あぁんっ！
だめぇっ
イく・・・
イっちゃう・・・っ♥
イっちゃうううううううっ！」
「ひゃあっ！」
「イっくうううううううっ♥
あああああああああ
あああああああああんっ！」

「んっ んんぅぅぅんっ♥
んっ んっ♥
はぅぅぅぅっ」
「音姫さんの体・・・
すごいびくんびくんしてる」
「んっ はあっ はあっ はっ」
「今すごく音姫さん
かわいい顔してますよ
もうずっとこうして
見ていたいくらいに」
「はあっ はあっ あ・・・っ♥」

「ごめんね・・・私だけイっちゃって・・・」

「そんなに気持ちよかったんですか？」

「うん・・・こんなの・・・初めて・・・っ♥」

「そりゃ良かったですそれが嘘だとわかっててもね」

「・・・」

「それじゃあ今度は俺がイかせてもらいますね」

「へ・・・っちょっと・・・っ」

「ひゃあぁぁんっ
だめぇっ！」
「何がダメなんですか
自分だけ先にイっちゃったくせに」
「あっ
やぁぁっ！
今イったばかりで
体が敏感になってるの！
だからちょっと
待ってっ」
「それはそれで
気持ちいいのと
違うんですか？」
「それは、
そのっ
ダメなの！」
ずぷぷ
ずぷぷ
ずぷぷ
ぐちゅぐちゅ

「いいじゃないですか
またイきたくなったら
我慢せずにどんどんイってください」
「だって・・・っ
これ以上気持ちよくなっちゃったら
私おかしくなっちゃう！」
「いいですよ
いくらでもおかしく
なってください」
「あっ♥
やっ♥
だめええぇっ！」
「これ以上おかしく
なっちゃったところ見られたら
恥ずかしくてもう死んじゃいそうっ！」
ずぶぶぶ
ずぶぶぶ
ぶしゅぶぶ

「だからこそ俺が命じてるんですよ音姫さんは言われた通り演じてください」
『・・・っ』
「俺は快楽に身を任せて我を失ってる音姫さんが見たいと脅迫してるんです言われたとおりにしてください」
「だって・・・自分でもどうなっちゃうかわからないし・・・っ」
「どんな音姫さんでも笑ったり軽蔑したりしませんから」
ずぷっ
ずぷっ
ずぷっ
ずぷっ

「だから音姫さんの全てを見せてください！」
「あああぁぁぁぁぁぁんっ！」
「だめぇっ！おちんちん気持ちいいっもっとっもっと突いてぇっ！もっともっとおまんこかき回してっ！」
「お尻つぶれちゃうくらい腰打ち付けておちんちんもっと深くまで貫いてぇっ！」
「私またすぐイっちゃうからそしたら絶対もう無理だから最後に限界までイかせてぇぇぇっ！」
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ

「おちんちん気持ちいいのっ！
おちんちん気持ちいいっ♥
気持ちいいっ♥
もっとおちんちん欲しいのっ♥
もっと欲しいのっ♥
ずっとずっと私の中にいて欲しいのっ♥
このおちんちんが大好きなのっ！」
「いいですよ！
このちんちんは音姫さんにあげます！
今からもう音姫さんのものです！」
「嬉しいっ♥
おちんちん大好きっ！
代わりに
私のおまんこあげるっ♥
私のおまんこあげるから
好きに使ってっ！」
「はい！嬉しいです！
俺も音姫さんのおまんこ
大好きですっ！」
「嬉しいっ♥
貰ってっ♥貰ってっ♥
私のおまんこ貰って♥
好きなだけじゅっぷじゅっぷ
してっ！」
ずぷっ
ずぷっ
ずぷっ
ずぷっ
じゅぷっ

「あっ！
あぁんっ♥
イきそう？
おちんちんイきそう？
私のおちんちんイきそうなの？」
「はいっ
もう限界です！
俺のおまんこも
イきそうですか？」
「うんっ
もうダメっ
イくっ♥イくっ♥
イっちゃうっ♥
今度は一緒にイこうね？
私のおちんちんと
あなたのおまんこ
一緒にイこうねっ？」
「はい！
でも何度も膣内で出すのは
さすがにヤバそうなんで・・・」
「ダメっ！
このおちんちんはもう
私のものなんだから！
私の膣内でしか射精しちゃ
ダメなんだから！」
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ

「いいんですね？
本当にまた膣内で出しちゃいますよ？」
「いいのっ！
さっきみたいに
いっぱいいっぱいせーえきびゅーってして
私の体の中全部せーえきでいっぱいにしてっ！
私のおちんちんでせーえき
びゅっびゅっして
頭の先までせーえき流し込んでっ！」
「はいっ
俺のおまんこの中に
ありったけの精液
ぶち込みますっ！」
「きてっ♥
きてっ♥
きてぇぇぇっ♥」
「私もイくっ♥
イくっ♥
イっちゃうううううううっ♥」
ずぷぷ
ずぷぷ
ずぷぷ
ずぷぷ

「あっ♥
あっ♥
あぁぁぁぁんっ♥」
「イくっ♥
イくっ♥
イっちゃうううううっ♥」
「ひゃっ！
あんっ♥
やあああぁぁぁぁっ！」
「あああああぁぁぁぁぁぁ
あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ
あんんっ！」
ぱんぱん
ぱんぱん
ぱんぱん
ぱんぱん

「はっはっあぁんっ！」
「はひっひゃひっ」
「あっやっやぁぁぁんっ
しゃせー止まんないよう」
「まだびゅーびゅーしてる・・・♥」
「せーえき私の膣内でいっぱいいっぱいびゅっびゅびゅっびゅしてる・・・♥」

「はあっ
はあっ
あっ♥」

「ようやく・・・・
収まったみたいです
本当にありったけ
出したって気分です」

「ひゃっ
あふっ
はふっ」

「音姫さん・・・・
生きてます・・・・?」

「ひゃひっ・・・・
ふぁら、
ひゃにら・・・・っ」

「・・・しばらく
待ったほうが
よさそうですね」

「はあっ
はっ
あ・・・っ
大丈夫・・・だから」

「ああ、よかった
ガチでちょっと
心配になってました」

「だって・・・
こんなに気持ちよく
させられちゃったんだもん♥
あなたの責任だよ♥」

「そりゃあ俺だって・・・
でも、まあ、その
すいません？」

「うふっ♥
えっちなのは
ダメなんだよ？♥」

「あなたが言いますか・・・」

「うふふっ
ごめんね？
本当は私の方が
あなたよりえっちかもね♥」

「はあっはあっあ・・・っ♥」
「やっと・・・ちんこ離してくれた感じですね」
「あ・・・っ♥あうっ♥」
「おまんこから俺の精液あふれててすげーエロいです」
ごぽ
どろ・・・
はぁ
はぁ
はぁ
「だって・・・あなたがあんなにいっぱいだすから・・・」
「だって音姫さんがいっぱい出してって・・・」

「ああ・・・今音姫さんの体の中に俺の精液たっぷり詰まってると思うとすげー興奮してくるんですけどさすがに今日はもう打ち止めですこれ以上は死ぬ」
「私も・・・もう本当にだめ・・・」
ごぽ
どろ・・・
はぁ
はぁ
はぁ
「それにしてもこんなに膣内に出しちゃって大丈夫なんですかね？もし妊娠しちゃったら・・・」

「・・・いいわけないでしょ」
「ええ？だって音姫さんが膣内で出してって・・・」
「それはあなたが無理やりそう言わせたんでしょ女の子脅してこんな酷いことするなんて・・・」
ごぽ、
どろ…、
はぁ、
はぁ、
はぁ、
「え？あ、はいそうでしたね」
「どうしよう・・・弟くんのならともかくあなたみたいな人の赤ちゃんできちゃったら・・・」

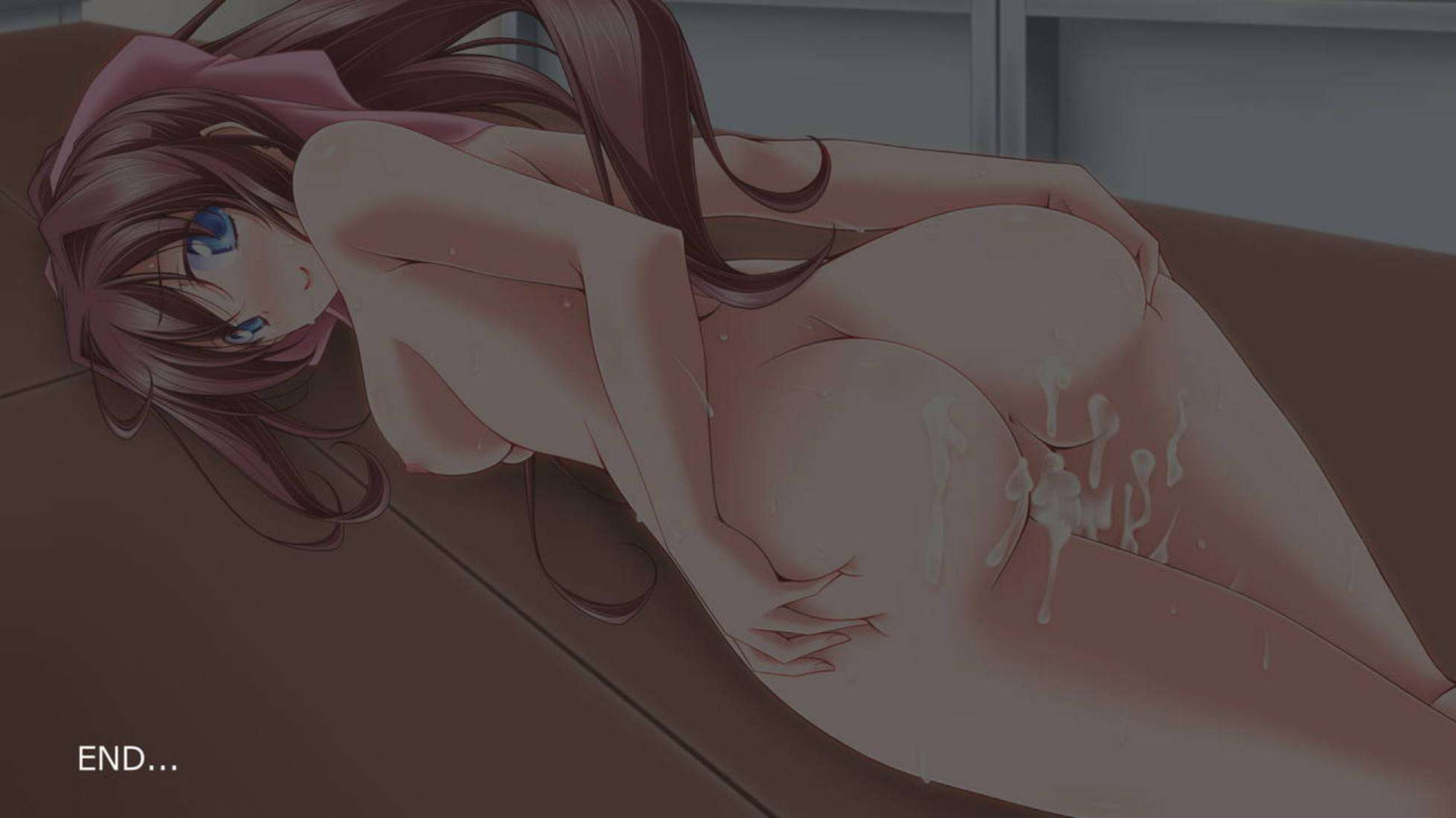
どうやら今日はこれ以上は無理と判断してか
元の音姫さんに戻ってしまったようだ。
なんとも切り替えの
早いことだ。
ごぽ、
どろ…

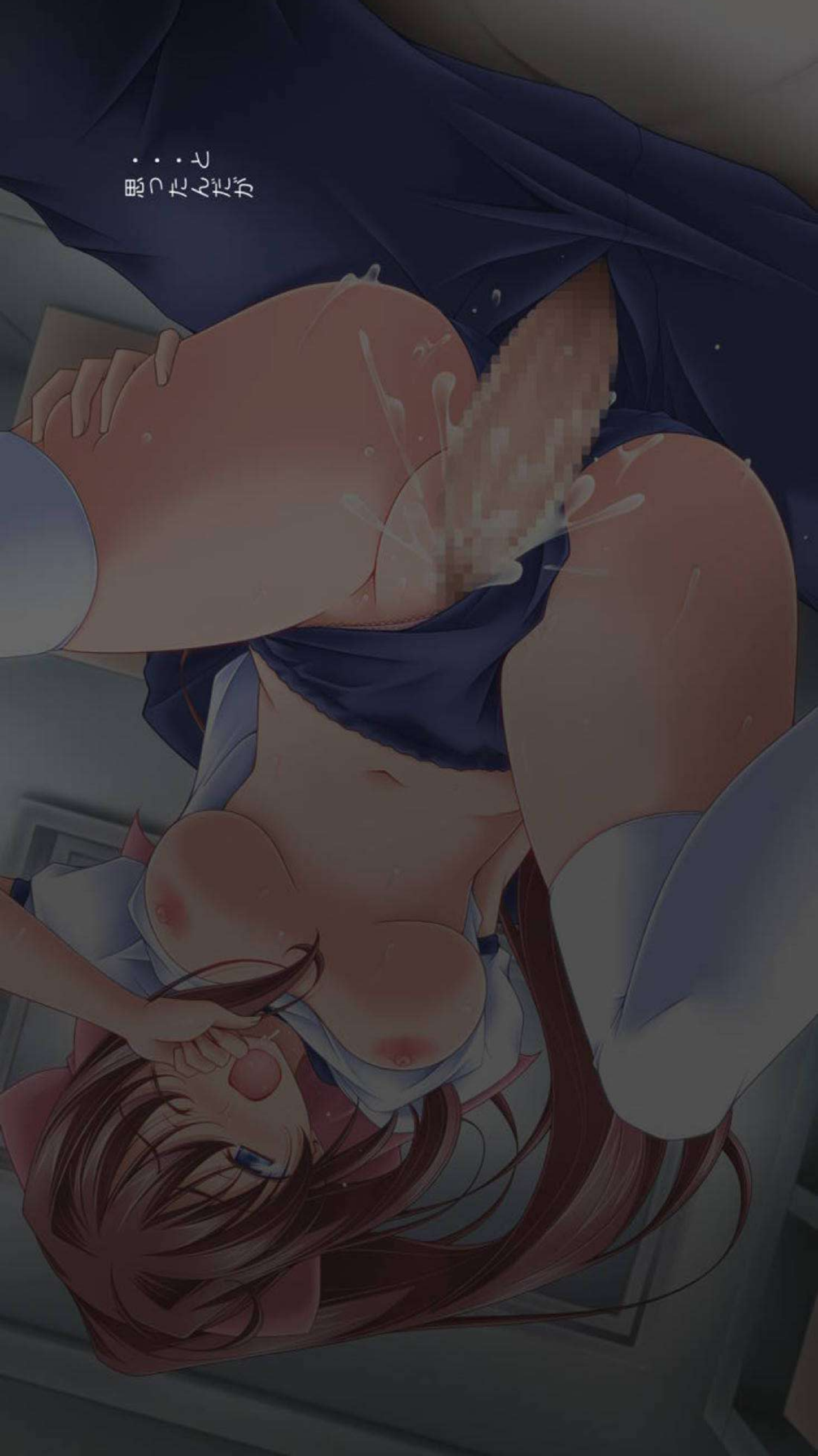
「終わったんならもうそんなに見ないで」
「はいはいすいませんね」
はぁ
はぁ
はぁ
まあ、そんな意外と切り替えのしっかりしているところなんかも彼女の魅力のひとつなのかもしれない。

たとえ次があったとしても
彼女は同じ態度をとり続ける
のだろうと感じたが、同時に
次なんてもう二度とないだろう
という感触もあった。
この態度からも察せられるように
さすが生徒会長なんて
勤め上げられるだけもあって
こういった見極めはしっかし
していそうだし
脅しがハッタリだったことも
俺自身それがバレていると知りつつも
そんな茶番の関係を続けていく
甲斐性なんてない小心者だってことも
気付いているだろう。
現に俺はしだいに興奮の酔いが覚め
頭が冷静になればなるほど
音姫さんで脱童貞できた満足感より
自分のとった大それた行動に対する
恐怖心の方が大きくなってきている。
今後があったとして
『体だけの関係』なんて
大人びている感じがして
器量の小さい俺にはとても
こなせる自信はないし
より大胆に
これをきっかけに
音姫さんを桜内から完全に
寝取ろうなんて考えても
興奮するよりむしろ
恐怖しか感じないし
たとえその気になっても
俺には絶対に無理だろう。

だから俺が最後にできるのは
恐怖心と罪悪感で声が震えだす前に
精一杯の強がりを言ってみせる
ことくらいだった。
「それじゃあ
また今度楽しみましょうね」
「絶対に嫌です」
はぁ
はぁ
はぁ

そんなわけで
脱童貞どころかヘタをしたら
人生最初で最後になるかもしれない
俺の性体験は幕を下ろしたのだった。
ごぽ、
どろ…
「ふふっ、もう
えっちなことは
いけないんだからね♥」


END…


・・・と
思ったんだが

「あんっ
あんっ
もうこんなことやめてぇっ！」

「そう言いながら
ちんこ挿入した早々
まんこからエロそうな汁が
どんどんあふれて
きてるじゃないですか」

「だってぇ
これは・・・っ」

「だって
何です？」

「いつもあなたが
そうしろって無理やり・・・っ」

「もーっ
すぐそう言って
人のせいにする」

「そうでなきゃ
私こんな・・・っ」

「そうですね
音姫さんはもう何でも
俺の言いなりっすからね」

「そうだよ・・・っ
何でもあなたがさせるから
私の体こんなに・・・っ」

「こんなにいやらしくなっちゃったんでしょ？ほら言ってください」

「はい・・・いやらしい体になっちゃいました」

「ほらもっと詳しく」

「・・・あなたにおちんちん入れられちゃうだけでエッチなことしか考えられなくなっておまんこからいやらしいお汁がいっぱい溢れるようになっちゃいました」

「桜内とはならないの？」

「うん・・・弟くんのおちんちんじゃもう全然気持ちよくなれないのあなたのおちんちんじゃないともう私イけないの」

「あらあらかわいそうに」

「本心じゃないもん！あなたに脅迫されて無理やり言わされてるだけで・・・っ」
「そうっすねじゃあもっといやらしいこと言ってください」
「ああぁんっ！おちんちんまた私のおまんこの中の奥まで当たってきて気持ちいいのっ！」
「もっとっもっとっ！もっと深くまで突き上げてっ！」
「おまんこも膣内も子宮もクリトリスも私の体全部めちゃくちゃに犯しまくってえぇぇぇっ！」

もちろん無理強いなんてしていないし
そもそもあの日以来一度も俺の方から
音姫さんにちょっかいを出すことは
していなかった。

それなのに事あるごとに
音姫さんのほうから近づいてきて
俺の股間にその柔らかな体を押し当ててきて
勃起したと分かるやいなや
無言の圧力で人気のない所に連れ込んでは
まるで脅迫させられているかのように
恥じらいながら恥部をさらけ出してくるのだ。

もはや
脅迫されているのは俺だというのに。

「ああぁんっ
もうだめえぇっ！
今日も朝からずっと
あなたのおちんちん欲しくて
ずっと我慢してきたから
挿入されただけでもう
イっちゃいそうなのっ♥」
「いいですよ
俺はまだまだ平気ですけど
我慢しないで先に
イっちゃってください」
「やだぁ・・・っ
そんな意地悪言わないでぇ
私の体もう飽きちゃったの？
私のおまんこじゃもう
イけなくなっちゃったの？」
「違いますよ
音姫さんにもっと
気持ちよくなって
欲しいから
鍛えたんです」
「ホントに・・・？
嬉しいっ♥
でも二人一緒に
イったほうが
気持ちいいよっ♥
じゃあ私も
もうちょっと頑張って
みる・・・ね♥」

しかも最近は
挿入前にやたらと音姫さんの方から
そちらを希望するかのように
アナルにちんこをこすりつけてくる
ことが多々あったり、
先日は行為の最中におしっこが出そう
と言い出しあわてて中断して
トイレに行くよう促したのだが
あきらかに不服そうな表情を浮かべていた。

今はまだ何も気づかないふりを
続けていられているが
俺の脆弱な心が折れ
音姫さんの無言の脅迫に
嘘の脅迫で応えなければならない
日が来るのも時間の問題だろう。

しかもすっかり怯えきった俺は
せめてもとコンドームを準備
するようになったのだが
音姫さんは
「どうせ生で中出しする方が
気持ちいいって言って
途中で外すんでしょ？
ならはじめからしなくていいよ」
なんて勝手なことを言って
装着させるスキを与えてくれず
射精してしまう瞬間も
互いの性器を外すことを
許してくれない。

「ひゃうぅぅんっ！ごめんね、やっぱりもう我慢できない！おちんちん気持ちよくって私もうイっちゃうっ♥」
「俺も音姫さんがあんまりいやらしいこと言うもんだからもうイきそうです」
「だよね？だよね♥一緒にイった方が気持ちいいよね？♥」
「はい、気持ちいいです」
「おちんちんもおまんこの中でびゅーびゅーってした方が気持ちいいよね？♥」
「・・・はい中で出した方が気持ちいいです・・・」

「私また
おまんこに中出しされちゃうんだね？♥
赤ちゃんできちゃうかもしれないのに
そっちの方が気持ちいいからって
無理やり脅されて
子宮にいっぱい射精させられちゃうん
だよね？♥」
「そうです
その方が気持ちいいので
無理やり中出しさせてもらいます」
「じゃあ言うね？♥
本当はこんなこと
言いたくないけど
しかたなく言うね？♥」
「出して！
膣内にいっぱい出して！
温かくてぷりぷりの
私の大好きなせーえき
おまんこにいっぱいいっぱい
びゅーってしてっ♥
私の体の中隅々までせーえき
まみれにして
気持ちよくさせてっ♥
頭とんじゃうくらい
イかせてええええっ！♥」

「へひゃっ！
んふぅうっ！」
「んんんぅぅぅっ！
イくっ
イくぅっ
イっちゃうぅうぅうぅぅぅぅっ！」
「イっくぅぅぅぅぅぅぅぅぅ
ぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！♥」

「あっ！
ひゃぁんっ！
あああああぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！」

「イくっ♥
イっちゃうううう
うううううううう！♥」

「きもちいいいいいいいいいいいいいいっ！♥」

おわり…